

ダン・デイヴィス (著), 大間知 知子 (翻訳)

『金融詐欺の世界史』

(原書房)



東京情報大学 総合情報学部
教授 堂下 浩

法令順守の徹底や消費者保護の実現といった観点からも重要性を高めている。

本書は先ず「メイフェアのスキャンダル」と称された序章から始まり、第一章「基本原則」にてブルーカラー犯罪とホワイトカラー犯罪を大別した上で、後者の犯罪を『ロングファーム』、『偽造』、『コントロール詐欺』、そして『市場犯罪』という4つに区分し、続く各章において金融犯罪の手口やメカニズムなどを解説している。ただし、著者自身も指摘する通り、現実の金融犯罪や詐欺を体系化して整理することは難しいため、明確な定義を避けた上で各種犯罪を論じている点は本書の難解さを高めていると言わざるを得ない。

さて、第二章「ロングファーム詐欺」と第三章「雪だるま効果」において、詐欺の典型としてロングファーム詐欺の事例を幾つも紹介している。評者はロングファーム詐欺の語源が期間(long)や会社(firm)とは関係なく、古語と隠語に由来し、その定義を物品売買や役務提供を偽装した詐欺と理解した。第二章では1980年代のアメリカで社会問題となったメディケア乱用詐欺などを解説する。第三章では雪だるま式に詐欺被害が顕在化していくポンジスキームや無限連鎖講などを例示している。著者はこれら犯罪が成立する条件として、「人生に足りないものがある

評者は2006年の改正貸金業法の影響による信用収縮に伴い、消費者金融市場の多層化が進み拡大したヤミ金融について研究しているが、この種の金融犯罪や詐欺を扱った刊行物は学術的な分野では敬遠されがちなテーマである。本書の著者がイングランド銀行などでアナリストを務めた実務家である点は頷ける。

今日の日本において、多額の金融資産が様々な手口により収奪される事件が毎日のように報道される中、本書の主題である金融犯罪の事件簿を通史として理解することは「自らの資産を守る」ためだけでなく、金融ビジネスにおける

ると感じてセミナーに参加する人々」や、こうした人々で構成される「信頼の輪」の存在などを挙げている。

続く第四章「偽造」では、ポルトガルを舞台にした大規模な紙幣偽造やインドネシアの鉱物資源を巡る地質サンプルすり替えによる鉱山詐欺などが紹介され、その巧妙な手口や騙された側の落ち度について論じている。そして、第五章「粉飾決算」では不正会計と会計操作により投資家を騙す手口と、その横行を許してしまいがちな市場風土について説明される。評者はベンチャーキャピタルでの実務経験を有するが、グロス相場において投資家はスタートアップ企業の創業期コストを過小評価する傾向があるが、その結果、引き寄せられた詐欺師が市場で暗躍した事例を幾つか思い出した。

そして、第六章「コントロール詐欺」は評者が最も関心を抱いた金融犯罪である。著者は明確にコントロール詐欺を定義していないが、コントロール詐欺では「高給、ボーナス、ストックオプション、配当などの合法的な報酬が、架空の利益と実体のない資産に基づいて支給されるため、経営者は正直なビジネスパーソンよりはるかに高いリスクを取る傾向がある」と論じている。著者の説明はやや抽象的であるが、コントロール詐欺の具体例がS&L危機であろう。規制緩和が進む1980年代のアメリカにおいてS&Lの経営陣はハイリスク融資を建前に高額な報酬として「他人の金」(＝預金)を合法的に引き出していた。差し詰め日本なら、“長銀を潰した”と評されるEIEグループの高橋治則氏を巡る事件も同種かもしれない。

そして、第七章「詐欺の経済学」、第八章「未解決事件」と続き、第九章「市場犯罪」ではインサイダー取引やカルテルといった事件が紹介される。第十章「政府に対する詐欺」ではマネー

ロンダリングや脱税について解説される。評者は政府に対する詐欺は広義の『市場犯罪』に含まれると認識した。

最後の第十一章「結論」では、金融犯罪が発生する温床を『不正のトライアングル(動機、機会、正当化)』というモデルを使って説明している。著者によると「不正が起きやすい全体的な雰囲気は、その場所に漂うトライアングルの小さなかけらから生まれる」。つまり、カナダのような高信頼社会でも不正を生み出す「かけら」は数多く存在するからこそ、金融犯罪の根絶は不可能と論定している。そして、その発生を極小化する手段として、詐欺が社会の避けられない一部であると認めた上で、幼年期からの金銭教育の必要性を論じている。評者も全く同意見である。

全体を通して本書は金融犯罪に関する資料として専門家には重宝する内容だ。一方で、暗号資産を巡る詐欺やオンラインカジノを偽装したマネーロンダリングなど金融とデジタルが融合したことで新たに発生したサイバー金融犯罪にあまり言及されていない点は残念だ。

今日、金融犯罪摘発のために警察が多大な資源を投入している実情を考えると、金融市場が歩むべき方向を正しく捉えるために、学術分野でも金融犯罪や詐欺に関する研究を深化させるべきだと本書を通して確信した。